

薬剤耐性対策について

～動物と人の健康を守るのは **あなた** です!～



種鶏編

農場での対策に当

耐性菌発生の抑制は人と家畜に共通の課題です。耐性菌の増加を抑制し、

1 感染症の予防による抗菌剤の使用機会の低減

(1) 飼養衛生管理の徹底(飼養衛生管理基準の遵守)

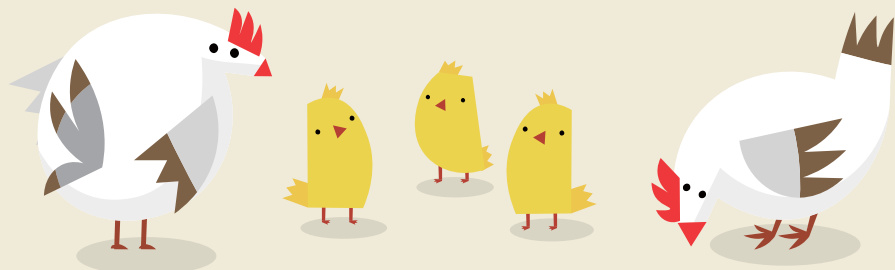
- マニュアルを作成し、これに従った飼養管理を徹底しましょう

経験を積んだスタッフは自らの経験をもとに適正な管理を行いますが、経験が浅いスタッフでも円滑に作業を進めることができるよう、適切なマニュアルを整備することが重要です。



- 疾病の侵入・発生を防止し、健全な鶏を育てるために衛生環境を整備しましょう

1. 品質の確認ができる素ヒナを
2. 導入は十分な間隔を
3. 水洗は十分に(洗浄が不十分だと消毒で病原体は完全に殺滅できません)
4. 消毒液は必要十分な濃度で使いましょう
5. 十分な育雛間隔を(農場に鶏のいない期間を設けることは防疫に極めて有効です)
6. 鶏舎ごとの隔離環境を確立しましょう(外履き、内履きの履物を区別するなど)
7. 新鮮な空気を与えましょう(十分な換気を)
8. 高品質の飼料を給与しましょう(十分な栄養で基本的な体力保持を)



たつての留意事項

健全な養鶏経営を維持するために守らなければならないことがあります。

- 餌付前の環境整備：素ヒナ導入前の水洗・消毒
完璧な消毒はありません。徹底した水洗いを実行しましょう。



(2) ワクチン接種の徹底

- 伝染性鶏病対策は確実なワクチネーションで
農場や地域の疾病の発生状況を把握して必要なワクチン接種を的確に実施しましょう。



2 獣医師による管理の必要性

獣医師の定期的な診察による成績改善のための防疫や管理指導を受けましょう。また、抗菌剤は、獣医師の診察・指示に従って使用し、慎重使用の徹底により、必要最小限の使用を実現しましょう。

- 薬剤投与は防疫の補助手段です

1. ワクチネーションや衛生管理の徹底で防ぎきれない細菌性疾病には抗菌剤を投与しますが、不十分な量や期間の投薬は耐性菌発生を助長することがあります。
2. マイコプラズマ・ガリセプチカム (MG)、マイコプラズマ・シノビエ (MS) は種鶏の汚染マーカーとされます。種鶏では、採卵鶏よりも抗菌剤を使用する機会が多い傾向にあります。
3. 抗菌剤を使用した種鶏やその種卵を食用に転用する場合は、獣医師の指示に従い、適切な休薬期間をとりましょう。

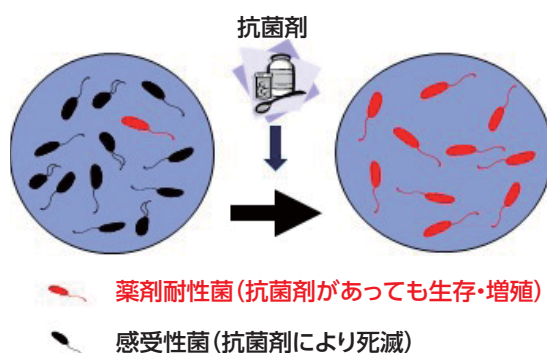
【薬剤耐性対策のキホン】

1 薬剤耐性菌とは

薬剤耐性菌とは、「抗菌剤が効かない細菌」のことで、抗菌剤の使い過ぎなどで増加し、人や動物の病気の治療を困難にします。

抗菌剤は、畜産分野では、動物用医薬品や飼料添加物として使用されています。

人の医療分野で増加した薬剤耐性菌による影響のほか、家畜への抗菌剤の使用により増加した薬剤耐性菌が、畜産物等を介して人に伝播し、人の治療を困難にすることが懸念されています。



2 薬剤耐性問題を巡る情勢

平成27年に世界保健機関 (WHO) が薬剤耐性対策の国際行動計画を採択するなど、国際的な重要課題となっています。

日本では、平成28年に決定された行動計画 (薬剤耐性 (AMR) 対策アクションプラン) に基づき、人医療分野や動物分野などが連携する“ワンヘルス”の考え方で対策を進めています。

我が国の行動計画の動物分野の対策の主なポイント

- 生産者や獣医師を含む関係者の理解醸成
- 薬剤耐性菌の動向調査の人医療分野との連携強化
- 衛生管理の徹底等による感染症予防
- 抗菌剤の慎重な使用の徹底
- 抗菌剤の代わりとなる薬等の開発

3 対策の基本 —抗菌剤の慎重使用—

- ① 衛生管理の徹底やワクチン使用により、病気を減らし、抗菌剤の使用機会を減らす
 - ② 適切な診断に基づいて、抗菌剤の使用を真に必要な場合に限定するとともに、使用する場合にも、有効な抗菌剤を必要最小限で使用する
- という“抗菌剤の慎重使用”の取組の徹底が重要です。

公益社団法人 中央畜産会

〒101-0021 東京都千代田区外神田2丁目16番2号
第2ディーアイシービル9階
TEL 03-6206-0832